

令和7年8月柏の集い案内

宣言

天風会の目的は、いつも愛と誠の心を持って生き、お互いに思いやりの気持ちで助け合う兄弟姉妹の数を殖やし、それによって世界の真の平和を確立することである

天風会

目的地を決めて歩き出す！

天風先生は、「東京に行く決めてその方向に向かって歩き出せば、必ず着くに決まっている」と仰っています。「決めた」時点で、それが「達成された」と同じ事になります。私はその考えがとても好きです。決めない事が達成される事はありません。金メダルを取ろうと思っていなかったのに偶然取れましたというのは、無い訳です。

なので、自分がやりたい事は、できるかな？できないかな？とは思いますが、「やると決めてしまう」のが楽だと気付きました。「決める」ことによって、「できる」に決まってしまうからです。

生きていくなかで、やりたいけれどなかなか出来ないことがあります。なかなか自分に本気で向き合えない自分。気が散ってしまい優先順位の低い他の事に手を付けてしまう自分。そんな事をしていて、期限ぎりぎりになってしまい、やっつけ仕事になったり（期限を過ぎてしまったり←これは完全にアウト！！）

「時間に間に合う」という事は、今までの私にとって「ギリギリでも間にあえばいい」という意味でした。いくら早く起きても何故かギリギリになってしまいます。なんでかな？

と思うと、早く起きて時間に余裕があると、他のことをついしたくなってしまうのです。ちょっとメールを確認したり、気になるYouTubeをみたり、Xをチェックしたり、読みかけの本を読みはじめたり・・・。（コラッ！）

今どうしてもやらなければならない事ではない事をついやってしまいます

鷹野講師の天風塾で「自分の欠点を克服しなければ成長はない」と言われ、私はこの癖を直したいと思いました。そして、この癖を直すと「決めた！！」わけです。今その目的地に向かって歩きだしたところです。先日の日曜行修会で、余裕を持って家を出ることができ、ひとりマッサージの担当になりました。焦ることなく落ちついて出来ました。その後、思いがけず厚木の井上さんからメールをいただきまして、「今日のひとりマッサージはいつもよりずっと良かったよ！！」とお褒めの言葉が書かれていてとても嬉しかったです。単に時間に間に合えばいいというのではなく、余裕を持って家を出ることによって、道中も慌てる事

なく、落ちついた気分である事が出来、その日にやるべき事についても質の高いパフォーマンスを実現できたみたいです。

大きな気付きを与えて下さった鷹野講師と井上さんには心から感謝いたしております。これからも、「ギリギリ仮面の私を直す」と「決めた」以上その目的地に向かって歩いていきます。どうか、皆様、なま暖かい目で見守ってください。

柏の集い8月行修会は下記のとおり開催します。皆さまのご参加お待ちしております。

今月の案内担当 米山彰子

【8月柏の集い行修会】

8月16日(土)・・・9時30分～12時 柏諏訪神社 参加費500円

戸外朝礼、室内行修・・・真人生の探究 担当 藤本益久

(真人生の探究お持ちの方は持参ください)

1、《天風先生の言葉》

中村天風

「生きていられることに感謝する」

人間は死ぬことを考えなかったら、恐ろしくもなんともないんですよ。人間の観念というものは、こちらを考えたらその逆はきえるんだから。人間の心はいちどきに二つは作動しない。喜びながら悲しむことはできない。立ちながら同時には座れない。前に進みながら同時に後ろには進めない。片方を考えたら、もう片方は消えるに決まっている。片方にある観念が出れば、もう片方の観念は消えるんだよ。

だから、死を恐ろしがらない観念が出れば、死は恐ろしくもなんともなくなっちゃう。いやむしろ、快い感じを受けることはあっても、恐ろしいとか、おせっかいなどとは考えなくなっちゃうんだよ。いつもと同じ感じなんです・・・

だからあなた方もね、私のこの気持ちと同様になって、考え方をふりかえてごらん。「生まれてこなきゃ生きてない。生れたから生きている。ああ、ありがたいことだ」と。生きている現在を、ただありがたく感謝して生きたらどうだい。生きてることだけに感謝して、生きるだけを考えるんだよ。生きてるんだぜ。息が絶えないかぎり。たとえやがて死ぬであろう臨終が迫ってるときでも、息が絶えないかぎりには生きていることだけを考えて、生きていることに感謝して生きるんだ。

これははっきり覚えておかないと駄目だよ。「生きていられることに感謝する」という気持ちで生きるのは、大きな哲学だよ。「生きていることに感謝している人間は」「生きている気持ちの人間」なんだよ。「生きていても死ぬことばかり考えている人間は」「死んでる気持ちの人間」なんだ。

ちょっとした言葉だが、ここには大きな違いがあるんです。この死生観がわかるから偉いとか、わからないから偉くないとは言いません。ただしかし、これが天風の死生観なのであります。私は、それをそうだと、理屈抜きに自分の信念になって生きている。いつも冗談半分でこう言ってるだろう。「死ぬことは死んだのちにお考えなさい」って。実際には死んだのちには考えられませんよ、考える働きがないんだから。

だからただ一途に、生きていることだけに感謝して生きることになろうじゃないか。それでもわからなかったら、自分にきいてみろ。「俺は生きているか？ 死んでいるか？」これは笑話のようなだが、大きな悟りだよ。とくに、病のときや運命に阻まれたとき、よりいっそう、この気持ちをはっきりもつようにしなさい。「どんな辛いことがあったって、生きてるんだ」ただ、理屈抜きでそう思いなさい。ああでもねえ、こうでもねえ、滑った転んだっていう理屈がなんだい。小さな頭の中の脳髓のもつれから出ただけのことじゃねえか。そんなことはなにもいらないんだ。ただ生きていることをありがたいと思って、どんな場合でも「ああ、いきている」、これでいい。

私の家内は「生きてる、生きてる」と、生きているまんまで私の手を握りながら、あの世に旅立った。ここなんだよ。いつも言ってる「晴れてよし 曇りてもよし 富士の山」というのはこういうことなんだ。

なにがあっても、びくともするもんか。生きてるんだ。ことがある日もことなき日と同様、生きてることを楽しむ。これをあなた方の心に置いといてくださいよ。

(信念の奇跡・第一章 私の死生観)



中村天風師

2、《東京タワーはかくて完成した》

内藤多四郎

(日本建築積算協会本副会長)

戦後から十数年で東京タワーを設計

1957年、東京タワーの設計者として、父・内藤多仲に白羽の矢が立ちます。産経新聞社社長で、時の国会議員であった前田久吉から、「エッフェル塔の三百二十メートルを凌ぐ

世界一高い電波塔ができないか」と要望があったのです。地震と台風が多発し、敗戦から立ち直り切って日本で、そんなことが可能なのか。関係者の誰もが心配しましたが、父は、それを「鉄塔造りは、私に課せられた宿縁」と快諾するのです。

この時、父、七十歳。四十五年間務めた早稲田大学を退職し、名誉教授になったばかりでした。父はすぐさま基本設計に入り、同時に二人の教え子に声をかけ、共に構想を練っていきます。前例のないタワーであり、膨大な計算が必要でした。驚くべきことの一つは、それを電卓や、コンピュータではなく、恩師の佐野先生にもらった小さな計算尺を使ってすべて自分の手で行っていった点です。

いまならこんな計算もすぐできると思われるでしょう。しかし、電卓があればできるわけでもないのです。東京タワーに求められる役割は、テレビ局が増え電波が錯綜する時代に、関東一円に安定したテレビ電波を流すこと。そのためには前例のない高さの塔を建て、同時に揺れを最低限に抑える必要がありました。加えて、戦後間もない東京で鉄を大量に揃えるのは大変難しかったのです。これではタワーがつくれません。そこで父が打ち出したのは、過去に地震や台風を乗り切った塔の構造を踏まえ、鉄をエッフェル塔の半分以上にする案でした。教え子たちが驚く中、様々な揺れや風に耐え得る部材の強度を割り出すべく膨大な計算に入ります。耐震構造理論を打ち立て、知悉していた父だからできた提案でした。

積み重ね つみ重ねても またつみかさね

当初はアンテナも含めた高さは三百八十メートルと予定されていましたが、それでは先端のアンテナが揺れすぎるため、結果として誰もが知る三百三十三メートルの高さに落ち着きました、設計はやり直しとなり、描かれた図面は三カ月で一万枚に及んでいます。この時学生だった私も一所懸命、構造計算書の清書を手伝ったことをいまも懐かしく思い出します。

そうして1958年、多くの人が待ち望んだ夢のタワーが完成したのです。

様々な困難を乗り越えて、努力を重ねてきた人生でしたが、父は決してその苦勞を表に出さない人でした。東京タワー完成の六年後、日本建築への貢献、功績が認められ、勲二等旭日重光章を受章します。こういう時ばかりは普段は寡黙な父も、親戚一同を集め、大いに感謝を伝えていました。授賞式の後には、郷里・山梨へ車を走らせ、若き日に学資の援助を受けた恩人の家を訪れています。

「積み重ね

つみ重ねても

またつみかさね」

八十四年の天寿を全うした父が晩年揮毫では、この言葉が厳正な漢字からだんだんと末広がりのひらがなに変わっています。父の生活全般で徹底していた生き方が表れているようです。

(人生100年時代の生き方教科書)



東京タワー 333メートル

《川柳》

ここまでは今年の漢字米でしょう
 セルフレジ母に店員二人つく
 AIに尋ねてみたい我が老後
 わが町についにきたぞよ備蓄米
 日の本の横綱誕生 阿見の町

(よみうり川柳・千葉版)
 (2025年サラリーマン川柳)
 (シルバー川柳)
 (柏市・益魚)
 (益魚)



茨城県稲敷郡阿見町・横綱大の里二所ノ関部屋

《エッセイ》

伊集院静

大人の酒は、

他人が驚くほど酔ってはイケナイ

豹変と言うのも困る。

笑い過ぎ（これは少々イイカ）、浮かれ過ぎ（程度によるが）、怒り過ぎ、さわり過ぎ（これが困るんだナ）、皆程度を過ぎてはイケナイ。酔っているのに、酔ってないと主張し過ぎるのもよくない。政治家の嘘と同じだ。年長者と呑む時に間違いがあってもいいが、年下や部下とやる時には、酒の上の理不尽があってはいけない。私はこれを守ってきた。

(風の中に立て)



伊集院 静

伊集院静さんは2023年11月73歳で逝去されました。

3, 《商人道を究める》

渡辺経営コンサルタント事務所

所長 渡辺雅文

私が20代半ばの頃、「売上を上げようと思うなら、お客様に奉仕しなさい。粗利益を確保しようと思うなら、お客様を満足させるような仕事をしなさい。利益を確保しようと思うなら、お客様に感謝されるような仕事をしなさい。」と教えてくれた近江商人がおりました。今思うと、まさにこれが商いの要諦であり、商人道の神髄のように思います。お客様に奉仕し、満足を与え、感謝される商いを貫けば、結果として、売り上げ、粗利益（限界利益）、経常利益は後からついてくるという教えです。これは、江戸時代の中期に、京都で商人たちに、商人のあるべき姿を説いた石田梅岩の石門心学の中核となる教え「先義後利（せんぎこうり）」（義を先にして、利を後にするものは栄える）に通じるものです。

考えてみれば、お客様に尽くし、満足させ、感謝されるような商いをすれば、お客様はそのお店（会社）を信用し、また購入（発注）しようというリピーターになり、見込み客や新しいお客様をご紹介します。要するに、満足したお客様や感動したお客様は、最良のセールスマンとなり、無報酬でPRしてくださり、売り上げや利益に貢献してくださるので。そして、ご紹介いただいたお客様に対しても、同様な商いを貫けば、そのお客様もリピーターや信者客につながってまいります。そうすると好循環の商いが実現していくのです。

よく言われることですが、「マスコミ（CMや折り込みチラシなど）で来たお客様は浮気するが、口コミ（ご紹介）で来たお客様は浮気しない」というのは真実だと思います。商人道を究めれば、自然と新規客（良客）が増えてくるのです。まさに商売は、いいお客様の数で決まるといっても過言ではありません。

改めて、岡田徹先生の詩（岡田徹詩集）に商いのあり方を学んでみませんか。

あなたの今日の仕事は
たった一人でもよい

あなたにありがとうと言ってくれる
お客という名の友をつくることである

※渡辺雅文様とは以前、天風会員であった頼経健治さん、同じく作家の神渡良平さん
(神渡さんとは多武峰夏期修練会で一緒でした) が主宰された武蔵嵐山志帥塾でご一緒
しその後季刊誌をお送りいただいています。

上記文は令和7年7月1日の渡辺事務所季刊誌掲載文を紹介しました。

※頼経健治さんは数年前に亡くなり、神渡良平さんは2023年5月亡くなりました。
神渡さんは天風先生の本を何冊も執筆出版されました。(藤本)



近江八幡の町

柏の集いの皆様 ご支援の皆様

8月葉月をむかえました。皆さま元気颯爽猛暑を乗り切っておられると思います。
私は5月久しぶりに茨城県大子町の袋田の滝を見学し翌日日本一のフクロウ神社・鷲子山
上神社(とりのこさんじょじんじゃ)を参拝しました。この神社の御祭神は鳥の神様で神社内
には大小多数のフクロウがおかれていて何とも不思議な、福をもたらしてくれそうな雰囲気
でした。興味ある方は一度行かれてはいかがでしょうか。

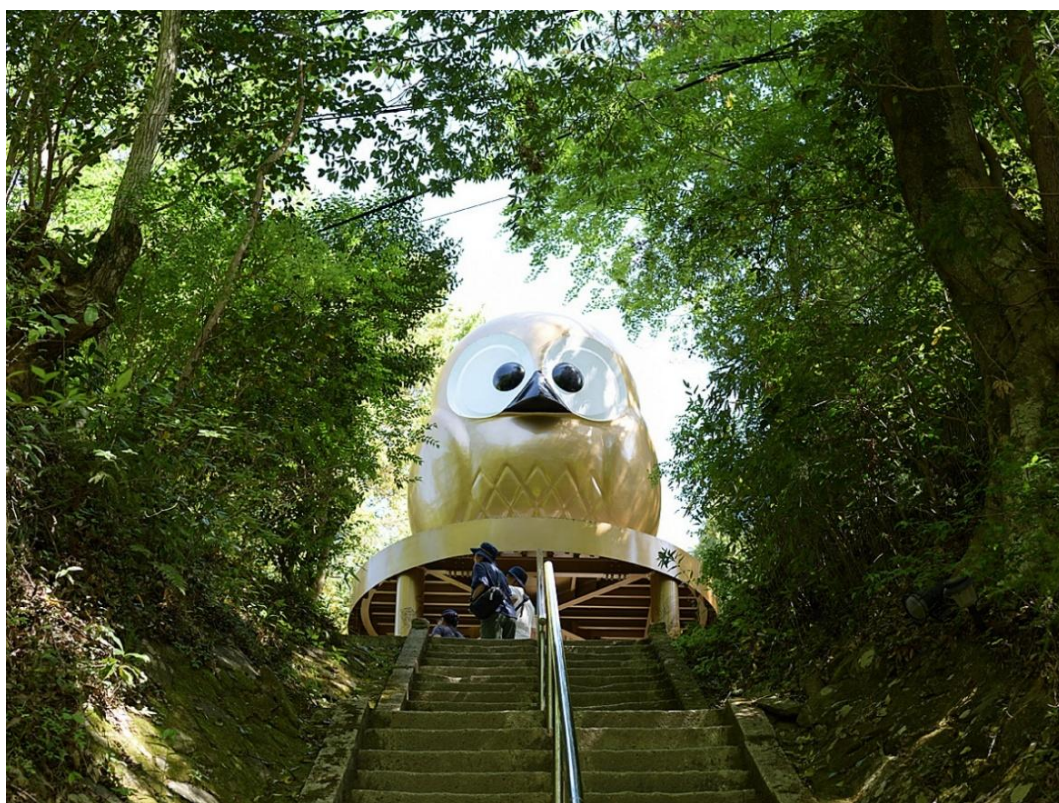
柏の集い行修会場柏諏訪神社はフクロウが4羽大きなケージ内の木にとまり、晴れの日
も雨の日もいつも周囲を見渡し参拝者を見守っています。

8月行修会から、天風先生が残された心身統一法の著書「**真人生の探究**」を勉強します。
いつもは講師講習会でお聞きしていますがこの機会に天風教義の原本となる同書を芋洗い
でともに学びましょう。 皆さまのご参加よろしくお願い申し上げます。

令和7年8月1日 柏の集い代表 藤本益久

中村天風財団柏の集い連絡所 郵便番号277-0835 柏市松ヶ崎 1077-17 藤本 益久方
TEL, FAX 04-7133-2785 携帯：090-1117-0943 e/mail:spzb8ev9@diary.ocn.ne.jp
〈ホームページ検索：天風会柏の集い・・・日程、案内掲載〉

近県のふくろう神社紹介



日本一の大フクロウ(不苦労)像
地上7メートル

鷲子山の御祭神は、天日鷲命(アメノヒワシノミコト)といわれる鳥の神様です。
古い時代よりフクロウが、
大神様の御使い・幸福を呼ぶ神鳥として崇敬されています。
境内には日本最大級の大フクロウをはじめ
多くのフクロウ像があり、運氣上昇・金運の福德・
パワースポットとして、全国より多くの方々が来山されます。



栃木県那須町・茨城県常陸大宮市、県境にあるとりのこさんじょうじんじや鳥子山上神社の大フクロウ象(本殿下)